

（「外壁のところに貼ってあった」と呼ぶ者あり）

○内谷重治市長 ああ、外壁のところに。ですから、多分後でつけたのか、最初ではないと思うんです。ですから、外壁にというのは、これからはちょっと難しいわけです。そんなにスペースもございませんし、この辺のところをどうするかですけども、平和都市宣言も大切ですけど、併せてやるんだったら、市民憲章も私はすべきだと思います。そのほうが、かえって生きるんです。平和都市宣言と、あと市民としてこういったことをみんなで守りましょう、頑張りましょうという、それは一緒にすることによって、むしろそれぞれ生きると思いますので、そこをどこにするかということと、あと、財源が、合わせれば1,000万円以上はかかると思います。

ですから、そういったことなども含めて、私ももし引き続きできるのであれば、検討します。私も空約束できませんので。ただ、本当に重要だと思っています。また、全国市長会の会長は今、広島市長ですし、応援、そんなに親しいわけではないんですけども、広島、長崎だけではなくて我々も、原爆だけではなくですからね。どういうふうにして平和を維持するかというのは非常に、次の世代のその先の世代のためにも、我々ちゃんとした行動をしなければいけないと思っています。ぜひそんなことで、少しお時間いただきたいと思います。よろしくお願いします。

○内谷邦彦議長 15番、今泉春江議員。

○15番 今泉春江議員 市長からは前向きな答弁と受け止めております。ぜひよろしくお願いいたします。

質問を終わります。

渡部秀樹議員の質問

○内谷邦彦議長 次に、順位11番、議席番号10番、渡部秀樹議員。

（10番渡部秀樹議員登壇）

○10番 渡部秀樹議員 お疲れさまでございます。21爽風会の渡部秀樹です。よろしくお願いいたします。

それでは、通告に従って質問させていただきます。このたびの質問は、教育行政の現状と課題等についての1項目であります。細目が数件ございますので、順次お答えいただきますよう、よろしくお願いいたします。

社会問題となっている少子化の中で、子供が健やかに育つ環境づくりを目指す本市の教育についてお聞きいたします。

1点目は、市内小・中学校及び高等学校の施設分離型一貫校（仮称長井学園）への移行並びに県立長井工業高等学校の市立高等学校への移管についての提案をさせていただきます。この質問は、議長のお許しをいただき配付させていただきました資料の両面にわたりますが、質問事項1の（1）もご覧になりながら、お聞きください。

この質問は、令和元年6月、令和3年6月、令和3年12月定例会に続く、学校の統廃合に係る4度目の提案になります。このたびは市内6つの小学校と2つの中学校に、長井工業高等学校も加えた小中高一貫教育並びに長井工業高等学校の市立化についての提案をさせていただきます。ちなみに、小中高一貫教育は、初等教育、中等教育、後期中等教育を切れ目なく、12年間を一貫したカリキュラムや独自の教育方針の下で展開する教育システムで、学習意欲の向上や発達段階に応じたきめ細やかな指導を強みとしています。また、県立高校の市立化は、全国的な事例から、自治体独自の教育方針の推進や地域の人材育成、少子化に伴う学校の統廃合回避などを目的に行われている政策であります。

さて、過去の一般質問を整理すると、1回目の令和元年6月定例会では、今後の市内小・中学校の統廃合について質問し、児童生徒の推移から、10年程度は市内小・中学校の統廃合の必要はないとの答弁をいただきました。あれからもう7年がたちましたので、あと3年を切りました。

その後、令和3年2月16日の文教常任委員会時に、長井市学校教育施設長寿命化計画で長期的計画から統廃合の可能性が示されたことを受け、2回目の質問として令和3年6月定例会時に、施設分離型小中一貫校を実施している茨城県つくば市のつくば洞峰学園の例を基に、仮称長井学園として施設分離型小中一貫校に移行してから、市内小・中学校の物理的な限界を迎える頃に緩やかに統合を迎えるような検討はできないのかと提案し、施設分離型小中一貫校は、小学校と中学校の今の形を残したまま学校運営を行っていくことで、非常に面白い視点だと思います。いずれにせよ、いろんな選択肢があることも事実ですので、長井の未来を担っていく子供の育成にどのような学習環境が必要となるのか、幅広い視点から議論しつつ、これまでの市内の学校での教育実践や、児童生徒の状況を分析・整理しながら、今後検討していく必要があると考えていると答弁をいただきました。

3回目の令和3年12月定例会では、長井市小中学校将来構想検討委員会を中心に、様々な考えを出しながら、時間をかけて合意形成を図っていくなどの答弁をいただきました。私は何度も申しましたが、長井市学校教育施設長寿命化計画からも、将来的に小・中学校の統廃合については避けることができない重い課題であると思っています。しかし、小規模校のよさを胸を張って行っている伊佐沢小学校の英語教育や致芳小学校に代表される、地域の未来を担う子供たちを地域の方々と共に育てていく地域教育は、今後においてもさらに重要性は増すもので、

市内全ての小・中学校は地域コミュニティの大切な基盤と感じております。なるべくならば統廃合をせずに存続を願いたいものですが、将来的に統廃合をせねばならないのであれば、じっくりと時間をかけ、なじませながら次のステージへと移行していくことを願っての提案をしています。

仮称長井学園として、市内小・中学校及び高等学校の施設分離型一貫校への移行並びに県立長井工業高等学校の市立高等学校への移管による利点や、その後の展望などについて、配付させていただきました資料のとおり、少しまとめさせていただきました。

仮称長井学園として、施設分離型一貫校への移管並びに市立高校への移管をした場合、当面は、市内全ての小学校は仮称長井学園の各小学校として存続され、中学校は学区を市内全域とするため、長井学園長井中学校の南校舎、北校舎として両校舎とも使用することになり、県立長井工業高等学校を、仮称長井学園の市立長井工業高等学校になる形が考えられます。組織としては、市長、教育長の下に学園長や各校長、各教頭、以下、教職員となるのが一例のようですが、一つの学園となるため、各教職員が病気やけがなどにより中長期の休養が必要になった場合や研修参加時に他校や他校舎からのフォロー、連携がしやすくなり、児童生徒の学校生活や学校運営にもよい効果が見込まれると思います。

さらに、各小学校でも将来を見据え、統一した教育方針の下で小規模校教育や地域教育を継続でき、山村留学生の受入れや交流、不登校児童の支援に特化した学校運営なども検討できるのではないのでしょうか。

さらに、中学校の進路指導や受験対策でも、統一した指導・対策がしやすくなり、長井工業高等学校では入学生の減少に歯止めがかかり、地域みらい留学の推進に拍車がかかるかもしれ

ませんし、小中高一貫校なので、高校受験がないため、中学生の受験ストレスの心配がなく、独自の一貫した教育プログラムが実践できるのではないのでしょうか。

また、長井工業高等学校の位置は、中学校統一時の校舎の位置としても不自然なく、中高一体の校舎としたときに、現在の北中グラウンドを第2グラウンドとして使用できる距離にあります。

そして、本市が仮称長井学園の高等学校として直接運営しつつ、5年間の一貫教育により実践的な技術者を育てる高等専門学校への転換を目指すことを検討できるのではないかなど、様々な利点や展望が考えられるわけです。

そこで、改めてお聞きいたします。市内小・中学校及び高等学校の施設分離型一貫校、仮称長井学園への移行及び県立長井工業高等学校の市立高等学校への移管について、検討はできないのでしょうか。地域の担い手確保や、地域産業の構築など、市政運営側の視点から、市長はどのようにお考えでしょうか。そして、本市の教育の未来像全般の視点から、教育長はどのようにお考えでしょうか、お聞きいたします。

次に、さきの質問でも触れさせていただきましたが、長井工業高等学校の高等専門学校への転換についてお聞きいたします。この質問は、議長のお許しをいただき配付させていただきました資料の質問事項1の(1)の③もご覧になりながら、お聞きください。

様々な手順が必要になるものの、高等学校を高等専門学校（高専校）に転換することは可能であるとされており、現在、文部科学省や各自治体では、公立高校を高専校へ転換する後押しをしているようです。また、国は地方の教育改革の一環として、専門高校の校舎の改修や設備投資のための新たな地方債を創設するなど、強力な財政支援を行っているようです。これはもちろん長井工業高等学校の高専化

にも使えるようで、事業費の最大9割を充当し、その5割、建て替えは3割に地方交付税措置が講じられる仕組みのようで、かなり強力な財政措置のようです。本市が得意なパターンの財政措置だと思います。

仮称長井学園として小中高一貫教育、県立長井工業高校の市立化と、さらに高専化は、多くの複雑な手順があるやに思います。しかし、3年間の後期中等教育に2年間を加えた5年間の一貫教育で実践的な専門技術者を育てる高等教育機関を設けることができれば、専門高校として魅力的な改革になると思います。また、入学志望者や、現在推進している地域みらい留学の受入れ数も増加する可能性があると思います。

そこで、改めてお聞きいたします。長井工業高等学校の高等専門学校への転換については、どのようにお考えでしょうか。教育長にお聞きいたします。

2点目は、困り感を抱える子供たちに寄り添った教育についてお聞きいたします。この質問は、議長のお許しをいただき配付させていただきました資料の質問事項1の(2)もご覧になりながら、お聞きください。

令和6年12月定例会では、困り感を抱え、長期の向精神薬を服用しながら特別支援学級に通う子供たちの現状等についてお話しさせていただき、向精神薬等による副作用や子供たちの校内活動について、相互理解を深めさせていただいたと思います。このたびは、長期間の向精神薬等の副作用に悩みながらも、毎日、笑顔で楽しげに特別支援学級に通う子供たちのそれぞれの近未来について、どのようにお考えになっているのかお聞きしたいと思います。

困り感を抱えながら特別支援学級に通う子供たちは、長期間の向精神薬等の副作用による、それぞれつらい副作用に悩みながらも、毎日、笑顔で楽しげに登校し、日々の学校生活を送っているようです。各クラスは少人数の教

室で、支援員のサポートも受けながら、担任の先生の授業を受けております。自閉症やＡＥ／ＨＤ、学習障がい、軽度な心身障がいなど、抱えている困り感は様々ですが、強い向精神薬の助けを借りながらではありますが、小学校高学年ぐらいになると、自ら心を落ち着かせ、普通学級に通う子供たちと大きな差もなく過ごせる子供たちも多数見受けられます。

そこで気になるのが、特別支援学級にいつまで籍を置くのかなのです。私自身や私の親族の経験から、特別支援学級は仕組み上、どうしても教育より保育に近い状況になりがちで、中等教育に移行する時点での足かせになる可能性を感じています。私自身や私の親族は、ともに特殊学級に在籍していた時期がありましたが、タイミングよく普通学級に戻ることができ、私はこうして議場に立っており、私の親族は大学院を卒業し、一般企業に勤めております。

学校教育は、社会に出るための大切な学びであり、子供たちが社会という大空を羽ばたけるよう導いていただきたいと思います。インクルーシブ社会の浸透とは逆に、特別支援学級については囲い込みが強くなっていると感じています。

そこで、特別支援学級に通う子供たちのそれぞれの近未来について、どのようにお考えになっているのか、教育長にお聞きしたいと思います。

次に、困り感を抱えながら普通学級に通う子供たちの支援などについてお聞きいたします。

令和6年12月定例会でも同様の質問をさせていただき、困り感を抱えている子供たちの中には、向精神薬を服用しながら、またはお薬の服用を見合わせながら普通学級に通う子供たちや、学校教育支援員の方のケアを受けている場合と受けていない場合など、様々なケースの子供たちがいる中での支援体制などについてお聞きいたしました。私は向精神薬の処方のため、専門

の病院に月に1回から2回伺うのですが、ここ最近、通院している子供たちが増加しているように感じていますし、本市の子供たちも多数見受けられますので、とても気にかかりました。

そこで、困り感を抱えながら普通学級に通う子供たちの現状について、教育長にお聞きしたいと思います。また、教育長がお気づきの点があればお聞かせください。

壇上からの質問は、以上になります。

○内谷邦彦議長 内谷重治市長。

○内谷重治市長 渡部秀樹議員から大きく1点、教育行政の現状と課題等についてということで、大変大きなご提言をいただきました。ありがとうございます。社会問題となっている少子化の中で、子供が健やかに育つ環境づくりを目指し、本市の教育についてご提言をいただいたということでございます。

私のほうへは、議員がおっしゃっている（１）の市内小中高等学校の施設分離型一貫校、仮称長井学園への移行及び県立長井工業高等学校の市立高等学校への移管についてということで、私へは地域の担い手確保や地域産業の構築など、市としてどのように考えるかというお尋ねでございます。

まず、大きい、いろんな構想でございますので、私がどういうふうに考えるかですが、一つは、小学校から言いますと、まず当面すべきでない。当面なんです、できればしたくないんです。それは、今のままでいきますと、どんどんどんどん子供が減っていったって、例えば国の社人研の人口予測ですと、2050年、今から24年後ですね、長井市でも38%ぐらいの人口が減ると。周りのまち、特に西置賜の3町、あと川西、4町、周り見ますと、もう50%前後なんです。飯豊町が50にならないぐらいで、あとはみんな50を超えているんですね。そのときに、当然今、長井市でも一昨年100名減りました。昨年は100名を超えたかもしれませんが、そういう厳しい

状況です。

じゃあ、38%減るから子供も38%かという、そうではなくて、もっと厳しい数字になるのは明白です。そんなことを考えたときに、いずれ全部一緒になる必要があるのではないかと思うのは、国も進めています、当然なんですけども、その逆もまた真なりなんです。実は統廃合することによって余計減るんです。減るというのは、子育て世帯が移るんです、どこかに。要は小学生のうちから、長井はよっぽどいいですよ、多分長井一つ、例えば長井小学校に全部まとめますとなったときに、せいぜいスクールバスでも15分とか20分なんてかからずに来るでしょうから。ところが、長井みたいなまちはまれで、ほかのところは多分1時間かかるお子さんがいっぱい出るのではないかと。そういったときに、じゃあ統廃合したら、自分が住んでいるところは親とは同居していないし、もっと都市機能が整っていて、なおかつ職場はある程度、まあ1時間は嫌だけど、四、五十分はしょうがないかなと考えるのが普通なんです。

でも、これが統廃合しないで、学力は落ちると思っていたら、これ違います。学力はいろんな、特にEU諸国の教育を学べば学力は落ちない。むしろこれからの時代に生きていくときに、今の教育というのは大分変わってきました。渡部議員も小学校の、授業参観みたいな、ご覧になったことがあると思うんですけども、1人1台タブレットの時代ですから、クラス例えば30人いたとしたら、30人で同じことを、同じ方向で進めていくなんていうやり方ではないんです。一見そのようなんです、一人一人が自分で調べて、自分で考えて、それで自分で答えを出すということをしっかりと、もう先生方は分かっているわけです。もうタブレットで全部つながっていますから、先生と。

ですから、もうこのやり方は、当然これからの時代に生きる、そういう子供たちのことを想

定しながら、これが全てではないでしょうけども、そういう方法も、もう取っているわけです。もう我々が学んだ、小学校で黒板に先生が書いて、これ分かる人、手を挙げてなんていう時代ではないです。みんな出さなくてはいけないんです。ただ、みんなの前で発言するのではなくて、それを先生は、あつ、内谷重治君は分かっているんだと、あつ、渡部秀樹君はちゃんと分かっているじゃん、全部分かるわけですよ。ですから、一人一人がもうちゃんと考えて答えを出さなくてはいけない。そのためには、ネットで調べてやることもオーケーなんです。ですから、そういう、昔で言った探究型みたいなことは、もう既に普通になっていると。

ですから、そういう意味で言えば、私も6校ありますよね。でも、見事に違います。それはなぜかという、それぞれの地域性があるんです。それぞれの地域性に、小学校の周りの地域の人たちのいろんな意思が入って伝統や文化になっているんです。ですから、私は小学校を、いずれしなくてはいけない時期もあるかもしれないですけども、むしろそういうふうに保護者の人たちも、生まれ育ったところに住みながら、そしてずっと学校、子供たちを真ん中に、こどもまんなか社会ですよ、そういうことを目指していこうと。

学習方法は、いろいろ学べば絶対、能力というか、知識は落ちないで時代に沿うような、そういう考え方ができる子供たちが、むしろ育つだろうと。そういうことをやっていたら、ほかのところは統廃合しているわけですから、長井が成功したら長井に来ますよ。それを目指しているんです。ですから、逆もまた真なりと言ったんですね。それを保育園もやりたいと。

ただし、小学校はそうでも、中学校と高校は別に考えたほうがいいのかなと思っています。中学校は、これから小学校も含めて、今後どうするかということについては教育委員会のほう

でしっかりと委員会を設けて、皆さん、保護者を含めて、先生方の考えなども聞いて方向性を定めますが、一方で、中学校は、私個人としては、いずれ今、統合中学が、それが2校か1校かっていったときは、生徒数の予測で1校にしてもいいだろうし、2校続けて当面やっていくという考え方もあるかもしれません。

あと、もう一つ、高校については、特に県立高校2校あるわけですが、非常に県の高校でありながら、もう少し現実を見てほしいなと私は思っています。議員もご承知のとおり、文部科学省のほうも公立高校の再編といいますかね、今後の、どういうふうな学科とか専門とか、あとは運営をしていくべきかということ、この5月に全ての都道府県に求めている、山形県も報告していると思います。その中身がどうなるかでございますが、それは文部科学省が2040年、そのときの生産年齢人口がどんどん減っていく中で、どういう人材が社会に必要とされているのかということと密接に関係した、今回の公立高校の考え方をもう一回改めていくという改革だと思っています。

エッセンシャルワーカーとか理系人材が極端に不足するんです。今のままでいくと、偏差値の高い、あるいは普通高校志向でいくと、失礼な言い方ですと、2040年に国が描いているいろんなデータに基づいていくと、理系の工業高校、農業高校等々の、実業高校の卒業生、大学へ進学する場合ももちろんあるんですけども、そういう人材が不足すると言っているわけですよね。

だから、山形県どうなるかですが、過去の例からいいますと、長井工業高校は、また学科減らされる可能性があります。ですから、高校については、もうできれば市立にしたほうがいいのではないかと考えています。そのときに、ただ、問題になるのが、教師の人件費については、国が全て100%見てくれるわけではないんです。基本、県のほう、教育長からお聞きしたら、例

えば山形県内ですと、山形市立商業高校があるわけです。非常に競争率も高くて評価の高い、日本一の商業高校だと山形市さんではおっしゃっていますけども、そういったことをやるにはやるなりの、緻密な準備をされてきたんです。

そういったことをいった場合に、私ども長井工業高校も市立でやって、もう学科も増やしたいぐらいです。でも、ちょっと私ども長井市でできるかどうかというのが一番課題なんですね。人材と、あと、資金的な面も含めて、これはこれから勉強しなくてはいけないと思っていますが、そういった意味で、ちょっと長くなりましたのでまとめますが、ぜひ長井市内を全部小中高一貫として長井学園みたいな形で、小学校は当面6校あるとしても、いずれ長井工業高校みたいな形で、平たく言えば私立の学園みたいな、学校法人みたいな感じですね。その際、課題になるのは、理系の長井工業に行きたい子供と、そうではない子供がいるわけですね。それが、長井工業高校が小中高一貫だということ、これちょっと誤解を招くので、小中と高は分けたほうがいいと思います。ただし、市立に私は賛成です。

あと、中学校の場合も、中高一貫したほうが、多分、より無駄がない。小学校から一緒にすれば無駄がなくて、学校の経営方針もしっかり、教育方針もしっかり打ち出せて分かりやすいんですけども、ただ、工業高校というと、普通科でもないの、なかなかこのところは選べる仕組みが必要だろうということで、中高一貫はあっても、中学校も、そのときはもう一つ別の中学校があって、長井工業と中高一貫のほうに行きたいという生徒の皆さんが選ぶ。あと、一般の、そうじゃない、いや、自分は違う方向で行きたいという子供たち、生徒が選ぶのはもう一つの中学校ということになると思います。

長井工業高校も、それから長井高校も非常に心配です。特に長井高校は、もう昔の面影がち

よつとないなど。保護者もかなり戸惑っているようですね。長井工業高校は保護者が一生懸命応援しているんですが、長井高校については、もうかなり変わってきているので、保護者のほうから長井高校を何とかしてくれと。いや、あれは県立高校なので。いや、それでも市でも何かできるだろうみたいに、かなり言われます。心配しています、相当。ですから、県立高校の行方というのは、本当に私どもは無関心でいられません。せっかく小・中学校、手塩にかけて育てた子供たちが、高校へ行った途端、我々とはもう関係がぷちっと切られるわけですから、少なくとも長井工業高校と長井高校は長井市内にありますので、そこはしっかりと連携を組めるようにしていきたいと思います。

お尋ねの件については、ちょっと長くなるのでぱっと申し上げますが、長井工業高校に関しては、「長工生よ、地域を潤す源流となれ！」のスローガンに、渡部議員おっしゃるとおり、これまで地元企業と深い関係を持ち、人材を輩出してきた、地元をまさに支えてきた学校、高校だと思います。市としても技能検定やQC検定等の取組に対し、継続して支援をしています。しかしながら、少子化の影響で令和8年度の生徒数につきましては、1年生が32名、2年生が51名、3年生45名、計128名といった状況になっています。非常に残念です。

このような状況を改善するため、市の重要事業要望として県にも要望活動を行っています。義務教育と高校教育が一体となったキャリア教育と、特色ある教育プログラムの推進や、JICAによりますタンザニアとの地域共創型事業の推進、意欲ある生徒を呼び込むための県外生の受入れの推進等、生徒確保につながる取組について要望しておりますが、現実的には県のほうでは考え方があるので、なかなか進まない状況です。

昨年度より募集を開始した地域みらい留学で

は、今年度1名入学があり、長井商工会議所とも連携して、生徒の食事などの生活面でのサポート等がありますが、まだ取組を始めたばかりの状況です。

近年は、同校生徒が日本政策金融公庫主催の全国高校生ビジネスグランプリで3年連続ベスト100の好成績を上げております。ちなみに、このベスト100には、首都圏は一流の東大へ何十名入っている、半分東大生というところしかありません。それぐらい地方のほう、山形県では長井工業高校が素晴らしい教育をしているということですね。

このような特殊教育プログラムの成果を、県内外へその魅力を発信しながら生徒確保につなげる取組につなげ、さらには地域の人材として活躍してもらいたいと考えております。ぜひこれからも、具体的には違ったとしても、いろいろ意見交換をしながら、よりよい方向を探りたいと思います。よろしくお願いいたします。ありがとうございました。

○内谷邦彦議長 土屋正人教育長。

○土屋正人教育長 私には、今後の小中高、学校の在り方が1つ、それからもう一つは、特別支援教育についてご質問ありましたので、お答えしたいと思います。

まず、1つ目の、小中並びに高校の施設分離型の一貫校、仮称長井学園についてのご提案をいただきました。かつ、長井工業の市立化、これは市長も今お答え申し上げましたけども、これについて、まずお答えをしたいと思います。

まず、今のお話ししました、施設分離型一貫校、この移管についてでありますけども、今回ご提案いただいて、渡部議員の基本的な考え、ちょっと整理したいなと思いました。まずは学校、今の学校を残すということ。それから、それぞれの学校が地域と共に築き上げてきた歴史、伝統、これをまず大切にして、それを一貫した方針の下で磨きをかけて、長井ならではの小学

校から高校までの教育環境をつくると私は捉えました。

このことによって、例えばよくあることですが、校長が替わるたび、経営方針変わるんです。こういうふうなことって、ぶれがまずなくなるということ。それから、特に私立高校というのは、ぶれがなくて、ずっと伝統的に貫いているわけですが、このように何年たっても変わらない学校理念の下に、小中高が一貫した教育が持続可能な形で実現につながると。これが大きな特徴なんだろうと思います。

さて、これらを踏まえた上で、議員のほうから小規模校を生かした長井の教育というのをご紹介いただきましたので、これについてもちょっと強みとしてお話をしたいと思います。

伊佐沢小学校をご紹介いただきました。この学校については本当に、楽しく学んで英語の力をつけるということでは、前回の議会でもお話ししましたが、全国のGTECという平均、これを極めて高く上回っています。20点から30点という驚異的な数値を残しておりますけども、これらのこともまず、特徴として挙げられるだろうと。

加えて、伊佐沢ならではの学校というのを地域みんなで考えようということで、今年はこれに加えて、コミセンを巻き込みながら、地域の人もこの英語学習に参加できないかということも考えています。つまり、いろいろバージョンアップしている。これは伊佐沢だからできることだと思います。

それから、西根小学校区にやまがたもりもりの森という自然体験学習ができる場所、ご存じのようにありますけども、これについては先週、大田区の教育総務部の部長さんがいらっしゃったとき、非常に関心をお持ちでした。ぜひこれを、例えば大田区の子供と交流をできないだろうか。またここに連れてきたいということがありました。これは西根でしかできない教育

です。こういったものを特徴づけて残したいという議員のお考えだと思います。

これは、市が方針としている、学校を含む地域、生活拠点を中心として、子供を真ん中に置いた地域づくり、これを根底として学校づくりをしようという、ここに通じる面があると私も思っております。

また、小学校、コミセン、学童、児童センター、これを地域の拠点としたときに、さらにその上の中学校、これを高校につなぐ。市長のほうからも中高一貫というのを大事にしたいとありましたが、私もこれは賛成です。そういったもののお考え、議員のお考えが、この在り方の一つの論点になるなと思って捉えました。

加えて、文部科学省のほうでは、今これだけの急速な人口減少と少子化を踏まえて、学校の適正規模・適正配置について、この3月に調査研究協力者会議、このまとめが報告されております。この中では、3つの論点があります。一つは、もうどんどん小さくなっている所以周辺の市町村も巻き込んだ圏域で検討するという、いわゆる広域化の考え方ありますよと。それからもう一つは、首長部局も含めた市町村の自治体の中で、その地域の未来を考える視点で検討する、いわゆる総合化という視点がありますよと。3つ目が、学習指導要領とGIGAスクール構想の推進が学校教育の状況に変化する、対応する、検討する現代化。これ、1点目と2点目を包含するような形の視点になると思います。今お話しした、2点目の視点が、まさに長井市の論点になると思います。

本市では、今年度から2年かけて、長井市における小学校、中学校の在り方について、今、文部科学省と、それから文化庁に在籍している2人の方をアドバイザーに招聘しながら検討を進めてまいります。長井市のそれぞれの地域で育まれた教育文化を大切に、小さな拠点を核にした立地適正化計画を踏まえた、長井市なら

ではの学校づくり構想を進めていきたいと思いを。今回立ち上げる会議については、答申という形でご意見を頂戴するようなものになるのかなと、今考えて準備を進めているところです。今後とも議員からのご指導、よろしくお願いしたいなと思います。

次は、2つ目の高校の高専化についてのご質問ですけども、今もお話ししましたが、この高校への進路動向というのは非常に大きく変わつつあります。まず、このことを受け止めていないと、その先の高校、高専、いわゆる高等専門学校への移管というのは語れませんので、これをまず述べさせていただきたいと思います。

今、大きく変わりましたと言いました。高校への進路動向については、私立高校の志願者が非常に勢いで増えております。例えば本市ですけども、昨年度、一昨年度までは大体私立の志望者が2割だったんですが、今年度3割を超えました。それから、近隣のまちでは既に4割を超えています。これらのことがまず、避けて通れないものであるということ。それから、加えて、6月4日、各新聞に、出生数の減少も大きな話題となって、全部の新聞紙で取り上げておりましたが、この生徒数の急激な減少というのは、これはもう本当に学校の在り方について大きな影響を与えていると思っております。

これらを踏まえると、地域に根差した公立の実業高校の魅力ある学校づくり、これと連動した生徒数確保、これは大きな課題であり、かつ長井の強みに通じるものだと思います。長井工業高校を考えますと、地域の産業を担う人材を育成する拠点とすることは、これは本市の持続可能な発展からも極めて重要な視点であると思いを。これらを踏まえて、長井高校、中高の連携から、現在、南北中の2年生が長井工業の課題研究発表会、これに参観すること、これも定着しております。

それから、今年度からですけども、小中高

一貫したキャリア教育の視点、これを一層の充実を目指したいということで、起業家教育というのを、やりたい子供だけで呼んでいたわけですが、これを南北中学校、それから長井工業高校で、学校のカリキュラムに位置づけました。それで学習することを計画しております。

加えて、地域みらい留学、これは市長からもありましたが、ここで千葉の生徒がたった一人で長井工業に来ました。私、今回見ていてすごく長井の強みだなと思ったのは、学校とか、その関係者、地域の温かな関わりの中で、本当に生き生きと学校生活を送っている、それが伝わってきました。これは本当に小さな事実かもしれませんが、でも、これは長井市の、私は強みが反映されている、大切な事実だと思います。こういった子供が長井という風土に育まれて、そういった教育環境の中で小学校から高校まで育つ、そんな教育環境をつくっていきたく思っておりますので、これもまた様々な視点から、高専化への転換も含めて、ご指導いただければありがたいなと思います。

続いて、困り感を抱える子供たちへの教育について、2点お話がありました。

これについてですけども、まず1つ、明確にお話ししておきたい。特別支援学級にいるから進学できない、普通学級にいるから進学できるという考えは、長井市では持っておりません。特別支援学級からでも、きちんと自分の進路に向けて、むしろその子の特性とか、それから、その子の特徴と、その子に合った教育を受けながら進路実現をしているということ、これをまずお話ししなくてはいけないなと思います。実際に特別支援学級に在籍した子供たちが中学校卒業後、本当にそれぞれが希望する高等学校への進学を果たしております。進学校に行った子供もおりますし、実業高校に行った子供もおります。

この間、実業高校に進学した子供が就職先で

非常に難しい国家試験に受かったと。社長さんに聞いたら、これなかなか受からないんだと。その子が本当に頑張って、自分の特徴というか、得意を伸ばして受かったということに本当に喜んでと言葉をいただきましたけども、私もそう思います。ですから、この子は特別支援学級から実業高校に行って、そこから就職して、今のような進路を実現しているわけですが、長井の一つの大きな特徴としては、特別支援学級と、それから普通学級をすみ分けするという考えではなくて、その子にとって何が一番大事なのか、その子にとってどんな教育環境が大事な環境なのかという1点で進めていっているところではあります。

ただ、議員からお話あったように、何か困り込んでいるのではないかという印象があったとすれば、これは私、考えているものとは全く、本意ではありませんので、そのことについてはぜひお話しください。一緒に考えていきたいと思います。よろしくお願いします。

これらを踏まえつつ、長井市のシステムとしてお話ししますけども、幼保小連携の専門員、それから教育支援員を配置しながら、支援の基盤づくり、それから、子供たちがそれぞれのペースに寄り添った人的なサポート体制、この充実に努めているところです。

また、小学校に入学した後ですけれども、市内全ての特別支援学級においては、個別の教育計画というものと、それから個別の指導計画、これは卒業後から就職までの支援計画をずっと立てて、一緒に計画をしていって、一緒に修正しながら積み上げていくものですが、これらを共有しながら、定期的な見直しと、それから指導に生かしているところです。これらの計画については、小学校から中学校、高校、その先の職場まで引き継がれて、将来にわたる切れ目ない支援とつながっていると思っているところです。

あわせて、先ほどからちょっとお話していますが、この在籍につきましては固定化することなく、本市の学びの支援委員会において、児童生徒の一人一人について、毎年丁寧に在籍の検討も行っています。医師、お医者さんの診断結果ですとか検査結果はもとより、子供の学習・生活面における成長、現在の困り感、保護者の意向も総合的に勘案して、常にその時々の子供にとっての最善の学びの場になるように判断しているところです。先ほどからお話ありましたが、親御さんが考えていないところもあるかもしれませんが、これは繰り返しになりますが、一緒に考えていくべきものであり、それを大事にしたいと思っております。

さて、今度は普通学級においての子供のことについてもご質問いただきましたが、これはちょっと重複します。もちろん普通学級在籍の中にも対人関係とか、そういったもので困り感を抱えている子供もおりますし、服薬している生徒ももちろんおります。私たちが一番大事にしたいのは、この子供の困り感、これの早期の気づきと、細やかな対応をしていく、これを非常に大事にしていると思っております。先ほどもお話ししたとおり、通常学級でも個別の教育支援計画、個別の指導計画について作成しているお子さんもおります。これも保護者の皆さんと共有しながら、定期的な見直しと、それから進路先、その先の職場につなぎながら、将来にわたる支援へとつなげているところであります。

特別支援学級と通常の学級といった枠組みに関係なく、全ての子供たちにとって、それぞれの可能性を最大限に伸ばすことができる学びの場はどこなのか、繰り返しになりますが、このことについて、この1点で努力をしているところ、つもりではありますので、ぜひご意見を頂戴したいと思います。この中で、いろんな子供が共に学ぶ意義、困り感を抱えている子供たちにとどまらず、みんなと一緒に、それぞれ個性

を受け入れ、助け合う、こんな学校が長井市の目指している学校であります。そのような視点から、またいろいろご意見頂戴できればと思います。

私からは以上であります。

○内谷邦彦議長 10番、渡部秀樹議員。

○10番 渡部秀樹議員 市長、教育長から丁寧に答弁いただきました。ありがとうございます。

まず、先に申しますけど、議場は合意形成の場所であると私は思っております。市長の、教育長のお話も、簡単に言うと、何%かは合意できる部分もあるやに感じております、15から20%という形で。話し合いを始めるに当たって100%合意を得られることなんてほぼないと思うんです。その中で、折り合いを立てながら、共に未来の形を描き、話し合い、そして積み上げていくものだとは私は思っていますので、これからこういった、少し突拍子もないような質問するかもしれませんが、ご容赦いただきたいと思います。

まず、最初は市長にお伺いしますが、今回、2枚使う裏表の質問事項の1の(1)と、1の(1)から1の1の3、1の(2)という形で、この資料が作りたくて一般質問するんだろうと言う方がいっぱいいるんですけど、そのとおりでありまして、分かりやすく、見やすく、私の頭の中、心の中で思っていることを具現化したものがこれになります。

山村留学、不登校児童生徒の山村留学に適しておりとあるんですけど、教育長はちゃんと私の意図を読んでいただきまして、お答えいただきました。特色のある学校は、我々にとって特色のある学校です。それはほかの地域から見れば、さらに特色のある学校に映ります。同じ市内の小学校だろうと見ている目線が我々の中にはどこかありますが、俯瞰して見ると、伊佐沢小学校の英語教育であったり、西根小学校の森の話、私も本当これ推奨していて、推進したく

て、だから本当は合併なんかしたくない。地域のいろんな学校を残したいです。豊田もそうですし、平野ももちろんそうです。致芳小学校なんて、地域の人が自分の子供のように全生徒を思ってくれていて、それはすごく感じております。

そんな中で、ただし、先ほども教育長もおっしゃったとおり、先生が、校長が替わると、何かちょっと変わってしまうというのも多々あります。それは市長が県立の学校のときにちょっとお話ししていただいたんですけど、そういうことはあると思いますので、最初の1枚目の横判のところの12年一貫した教育には12年一貫した教育理念が必要と書いているんですけど、私が長井市に求めているのは、その一貫した教育理念で、私は私立高校出身なんですね。本当は長井市内の高校へ入りたいんですけど、様々ありまして入れず、1年間浪人した挙げ句に、1年前に受かった学校に入ったという、ちょっとお父さんお母さんにすごく迷惑をかけましたと謝った経緯もあるんですけども、その中で、市立高校ではなく私立高校出身だから分かるのは、変わらない、受け継がれる、その理念というのがはっきりありまして、私がちょっと懇意にしている先輩の方にも議員の方がおりまして、お話しすると同じような返答が返ってくるという、受け継がれるものがあるんだななんということを感しました。

そこで長井工業高等学校の、さっき触れていただきましたけど、「地域を潤す源流となれ！」という、あの校舎が改築されたときにつくっていただいたお言葉なんですけど、すごく私は感銘を受けておりまして、今現在、私はあそこの長井工業高等学校のPTA副会長、来年会長予定者なんですけど、9年ほど前は長井高校のPTA副会長で学年部会長でした。両校の様々な変遷や、いいところ、悪いところ、様々あるやに思います。その中で感じているのは、

一貫した教育をできればなという思いです。

そして、中学生から高校生に上がったときの受験ストレスや受験対策、様々あると思うんですけど、私立高校を先に選んでしまった過去の例としてよくお聞きするのが、合格発表を待っていらんねえというお父様、お母様たちの声です。子供たちもちろん、卒業式の翌日あたりにしか合格発表はないです。私が受験した頃は、卒業式の前日に合格発表があって、私は皆様と違う涙を流しながらの卒業式だったわけなんですけど、3月の半ば過ぎないと合格発表が分からなかったのも、今はちょっと受験システムが変わったのであれなんですけど、そうやって待ってられないということで、私立で、しかも今、私立を選ぶ方々、受験する方が多くて、併願だとまず受からないです、物すごい倍率です、専願にしないと。

なので、先に安心して次のステップに踏みたくて、高校生の形に早く自分をしたくて、私立高校の専願を選んでしまう方が多い。もちろんあちらは手を替え品を替え、とても上手にPRしてきますので、学校での説明会でも、上手に生徒たちとお父さんお母さんの心をわしづかみにしていく姿を私もPTA、一保護者として見てきました。

この今回の資料の5つ目の写真ですか、長井工業高校地域みらい留学生募集中、私が勝手に作った、偏差値軸ではなく自分軸、やりたいで選ぶ高校生活、私はそれをネット上に落している言葉を継ぎ合わせて作ったんですけど、自分が目指す未来を自分たちが選んでいくというのが、若者にとってはとても必要だと思うんです。なので、こういったキャッチフレーズを用いて推進していただきたいと思う中で、どうしても県立高校であると、そういうところが少し弱くなる傾向を私は感じております。

長井市は内谷市長の下、こういったキャッチフレーズや推進はすごく上手になさっていると

私は感じておりますし、1問目の質問の最後に触れさせていただいております、高専高校の転換についても触れさせていただいておりますので、これを踏まえ、この魅力ある地域、魅力ある専門学校の市立化を踏まえ、市長にこの話をしていただきたいと思うんですけど、市長、高専化も含めて、魅力ある専門高校が地元であれば、長井市としてかなり違ってくると思うんですけど、どうでしょうか。

○内谷邦彦議長 内谷重治市長。

○内谷重治市長 渡部議員おっしゃるとおりだと思います。長井市の重要事業要望で、長井工業高等学校に高専化してほしいということで四、五年要望しました。結果として、それはできませんということでした。県内で工業高校に高専があるんです、米工さんだ。それがうまくいっていないと。うまくいっていないから駄目だ、こういう考え方なんです。ですから、もう話にならないと。

米沢工業高校もすごいいい高校です。でも、長井工業高校はまたちょっと違った魅力があって、それは地元に残って、地域のために頑張りたいと、製造業たくさんありますので。そういうこともあったので、進学しても戻ってくるお子さん、多いんです。けども、なかなか家庭の事情とか、いろいろなことがあって、本当は短大とか専門学校とか大学行きたいと、でも行けない状況だというときに、地元の長井工業高校に高専があれば、学びたいことを子供たちが学び、チャンスが増えるわけです。それを願ったのですが、何かが全くかみ合わなかったんです。県のほうの教育委員会のほうといろいろ話ししたんですが。

そんなことで、その辺りから、もう一つ学科減らしたら、よし、今度ぜひ何としても長井市立の工業高校にして、環境システムを、あれでしたよね、あのときも、もう本当腹立つ、今も立つ。もう机をたたきましたよ、幹部の皆さん

の前で。そんな最初から決めかかって、それをするためにこんなことをやっているのかみたいなことで。そしたら、白鷹町長、当時の前の橋本町長に、内谷君、まあまあ、まあまあと、いさめられましたけど、それぐらいひどかったです。

ということで、おっしゃることはよく分かります。ごめんなさい、以上です。

○内谷邦彦議長 10番、渡部秀樹議員。

○10番 渡部秀樹議員 市長のおっしゃることは重々分かっております。ですから、市立高校化して、少しイニシアチブではないですけど、こちら側で指導できるような形になればいいのかなと。教育長も先日ちょっとお話ししたときに、義務教育の教育よりも、その上のほうが私はすごく興味があるようなお話をいただきまして、私も同じ気持ちでいるなど。心のどこかでは、50%以上の合意が得られているところから、その高専化だったり、長井工業高等学校の市立化ではないのかななんていうことを思っています。

様々、話したいことはいっぱいあるんですが、あと2分ぐらいですので、お願いという形で終わらせていただきたいと思います。

すごく魅力的だと思うんです。財政的に苦しいし、どういう方法があるのか私も分からないのであれなんですけど、国も地方の専門高校に対して物すごくプッシュをしてきてくれている状況に、高市内閣からなっておりますので、市長もその辺を少し考えながら後押ししていただければと思う次第でありますし、教育長も私が言っていることがよく分かっていらっしゃると思いますので、そこを手伝っていただければと思う次第であります。何%でも合意が得られていけば、またお互いのいいところで組み合わせ、違う形になって全然いいんです。面白い形になると思いますので、よろしくお願ひしたいと思います。

最後、お願いなんですけど、私もそうでした

けど、当時は特殊学級といいましたね、にいる子供たちって何を目標しているか、一番最後で触れさせていただきます。普通です。みんなと一緒に。1対1の授業は、すごくよかったです。おかげで今でも算数は得意です。数学、得意です。理系、得意です。ですが、それがなぜできたかという、みんなと一緒にいたい、みんなと一緒に授業を受けたい、みんなと一緒に給食を食べたい、一緒に行き帰り、にこにこ笑いながら普通に通いたい、普通に高校進学して、普通に就職して、普通の長井の一市民として生活したいという思いで、私は特殊学級からいち早く一般教室に戻らせていただきました。掛け算、九九を覚えたらいいよという、絶対覚えられないだろうというところを私は覆し、2週間で覚え、ほぼ2年、行ったり来たりしましたけども、5年生の頃からは一般教室にほぼおりました、5年、6年と。で、今いるんです。教育長も分かっていると思いますけど、普通であることが美德でした。

私の一般質問を終わります。

○内谷邦彦議長 以上で一般質問は全部終了いたしました。

散 会

○内谷邦彦議長 本日はこれをもって散会いたします。ご協力ありがとうございました。

午前11時58分 散会